

' 82.2月

おもちゃと 私

ゲスト 津川 雅彦

つがわ・まさひこ 昭和 15 年 1 月 2 日、沢村国太郎の次男として京都に生まれる。早大卒。ひとり娘の真由子ちゃん
は 7 歳。東京・南青山ビル西館におもちゃショップ「グラン
パパ」を開いている。本名 加藤雅彦。

身を清めて子の前に

- 井深** 伝え聞くところによると、津川さんは、非常にお子さんの教育にご熱心だそうで・・・（笑い）それ、いったい、どういうわけで、そうなったんですか？
- 津川** ぼくはご承知かどうか、非常に晩婚でした - 娘が生まれたのは、30 台の後半でしたから。結婚して子どもが生まれるなら、どういうふうに育てよう、とか、いろいろ想像をめぐらしたり、理想を描いたりする時期がありましたものでね。
- 井深** ほう・・・感心だな、それは。
- 津川** ちょうどそういう時期に、数学者の岡潔先生のご本を読みましてね、その中に、井深さんと同じように、やはり零歳から 3 歳までがとても大切だ、ということをおっしゃってまして、私、それに、とても感動したんです。岡先生は、3 歳までに、子供の情緒というものの幅がきまってしまう、それ以後は、どうがんばったって、幅そのものはひろがらない、といわれるわけです。
- 井深** いま生まれた人だったら、どうにでもできる、というのが、われわれの基本の考え方です。
- 津川** 岡先生は、そして、3 歳ぐらいまでは大自然が子どもを育てるのだ、と。だから親は、うしろからちょっと手を添えてやればいいんであって、あまり前に乗り出すな、といわれているもので、ああそうかな、じゃあ、あまり教育なんていうことを考えないで、なるべく大自然に任せておくことだなあって思っていたんです。ただ実際に生まれてみると、子どものおしめをどう替えたらいいか、とか、お乳をどういうふうに飲ませたらいいか、とか、そういう下世話なことしか思いつかないわけです。で、ひょっと気がついてみたら、子どもが、ぼくのくせを、全部とっているんですね。ぼくが、腰が悪いものですから、うちにいると、たいがいねそべっているんですよ。そうすると子どもも、いろんな形でねそべっているんです。テレビを見るときも、おもちゃで遊ぶときも。
- 井深** ハハハハハ。
- 津川** いろんなことが全部真似されてしまっているんで、「あ、そうか、つまり子どもの教育ってのは、要するに、見てもらって真似してもらうことなんだ」と。“大自然”と岡先生がいつておられるが、要するにぼく自身も自然の一部なんで・・・。
- 井深** そうなんですよ。
- 津川** だからぼく自身が、子どもが生まれる前には、あらためて身を清めて、子どもの前に現れなきゃいけなかったんだ、ということに、あとで気がつきましてね。
- 井深** ことに、お母さんの後ろ姿で学ぶということは・・・。
- 津川** はいはい。
- 井深** 非常に意味の深いことですよ。
- 津川** 子どもは、ぼくらが意識していないときの、ぼくらの後ろ姿を見ているんだ、ということ、さかんにいうんです。
- 井深** そう、意識的に接していないときの姿勢を受けとめるんですね。

- 津川** それ、決して抽象的な意味じゃなくて、本当に後ろ姿なんですよ。
- 井深** だから形というものも、やっぱり非常に意味が大きいと思いますよ。子どもの情操とかマナーとかを育て上げるには、はじめはもう形ですよ。もちろん愛情の裏付けも必要ですが、「おはようございます」とか「ありがとう」とか、あるいは仏壇に手を合わせるとか、むしろ中身より形から、まず、いい後ろ姿を見せなければ、うそでしょうね。
- 津川** ところが、いまの時世の教育というのは、どんな結果を生んでいるかということ、女の子のメンスだって、昔は高校生ぐらいからだったのに、最近は小学校の3年、4年というのすら、いるわけでしょ。人間の、動物としての面が重視された結果がこれなんですよ。犯罪だって、低い年齢での増加がはっきりしていますでしょ。極端ないい方をすれば、原子爆弾なんて、物理学の発達段階から見れば、まだまだ、できるべき時期にはなってはいなかったのに、突然変異のように、できてしまった - ということは、もしかすると、神の啓示かも（笑い）知れない、という - 。
- 井深** そう岡先生が書いてるの？
- 津川** そうです。神さまが怒って、もう、人類なんかトウタしてしまえ、と、そういうお考えかも知れない。いまのおとなは、もはや救済難いから、これから生まれてくる子供をうまく育てて、やりなおさせよう、と、そういうお考えのあらわれかも知れないって、ハハハハ。

「タバコのもうか」と思うだけで

- 井深** いったみれば、それが考え方のポイントですよ。現在の人間をよくしようたって、それはもうしょうがない、ということですよ。ただ、いまのお話とちょっとちがうのは、生まれてすぐからの時期についての考え方ですがね。3歳で人間、ほぼきまってしまうということは、実にその通りで、「三つ子の魂、百まで」っていうのは、もうまさに…。
- 津川** すばらしい表現ですよ。
- 井深** ええ、うまいと思いますが、私のいいたいのは、いまの発達心理学とか教育学というのは、零歳からどんどん進歩し、発達していく、というところを忘れていて、2歳、3歳くらいからしか、幼児教育の対象に考えていないっていうことなんです。ところが、赤ちゃんは、3月もたつと、毎日おっぱいをくれるお母さんが1番すきになってしまうでしょ。生まれてすぐからくり返されることっていうのは、実に重要な意味があるんですよ。
- 津川** はいはい。
- 井深** 私流にいうと、人間は1年間早産してるんです、動物学的にいうと。
- 津川** あ、それわかります、なるほど。
- 井深** その早く生まれてしまった1年間に、最も激しく成長する…その代表が脳の配線ですよ。脳の細胞っていうのはもうでき上がってるんですが配線の方はそれからどんどんできていって、1年間に脳の重さは300グラムから800グラム以上までに成長するんです。その急成長するときに、何をなすべきか、ということに目をつけるのを忘れてるんですよ。

いままで赤ちゃんがうまく育つかどうか、ということが問題だった間は、医学的なケアが最も大切だったけど、いまはもう、脳の配線ができる間に、どういいう配線を入れてやるか、ということに、目をつけていいはずですよ。ましてね、いまはもう、おなかの中で、赤ちゃんが何でも聞いている、ということがはっきりわかっているんですからね。

津川 あ、そのあたりは初耳です。

井深 マイナス3ヵ月、4ヵ月で、赤ちゃんは、おとなたちの会話でも、ラジオの音楽でも、何でも、おなかの中でみな聞いているんですよ。いままでは、聞こえるわけがないっていわれていたんですけど、実はちゃんとはっきり聞こえているんです。音ばかりじゃないんです。お母さんがたばこをのむと、胎児の脈拍も上がるんです。お母さんが、たばこをのもうと思っただけで、赤ちゃんの脈拍にひびくんです。ホルモンとか、生理学的な条件らしいんですね。だから「胎教」ということは、昔のような意味じゃないけども、生化学的に、あり得るわけですよ。

津川 さきほどの1年早産というのは、よくわかります。動物は生まれるとすぐ、立って歩きますからね。

井深 人間とチンパンジーの違いは、そこだけだって、私いうんですよ。そこを、人間らしく扱ってやらねば、何にもなりませんでしょう。

津川 とっても説得力ありますね、そのいい方は。

井深 早く産み出されてしまった、その1年間は、お母さんは、うんとかわいがってやっていいけど、1年たったら、こんどは、動物たちのように、つき放してやるということを、極度に努力しなければいけないでしょうね。

津川 動物の場合は立ち上がったらもうあとは、一生けんめいお母さんについて歩くわけですからね。

井深 アヒルやカモなんていうのは、卵からかえると、親のそばを離れないように、一生けんめい歩いて歩きますでしょ。あれね、下り坂のときは、ひなもちょっと楽をする…努力をさぼってるんですけどね、登り坂のときは、遅れちゃ大変だから必死なんですよ。人間の赤ん坊だって、お母さんのお乳を吸うっていうのは、相当の努力が必要なんですよ。それ、らくに出てくる哺乳びんから牛乳を飲んで育ったんじゃ問題が出てくるんじゃないでしょうかね。

津川 育つ方の側も、真剣であるべきなんですよ。

電気機関車のユメが

井深 私はね、教育には絶対、飢餓が必要だと思うんです。いまは与えられすぎですよ。

津川 ぼくが親から教わって、1番よかったと思うことは「おなかが空いてからでなくては、食事はおいしくない、何事もそうなんだ」というのです。幸せを倍増させるためには苦勞せよ、と、必ず逆の方向にまず動きがないといけない、舞台の上だって、右へ行くときは、

まず左へちょっと振ってから右へ動く。そこに動作の優美さが出るってね。

井深 うん、なるほど。

津川 ぼくの小さいとき・・・小学校へ上がる前ごろですが、使いやすくて、舞台へよく出させられました。私の映画の出演料は、ブリキでできた小さなジープですよ（笑い）。車輪のところに輪ゴムがひっかけてありましてね、その輪ゴスをクルクル巻いて、その戻りで動くんですよ。

井深 そうそう、あった、あった。

津川 そういうの、10台、15台ってもらうんです。そうすると、大道具の人が、木片で車庫をつくってくれたりするんです。そのころ、おもちゃの電気機関車が現れたんです。たしか3000円だったと思います。

井深 そりゃ、大変だ。

津川 ぼくは京都に住んでいましたけど、東京で出演しているときは、その電気機関車を見にデパートへ連れてってもらうんです。そういう約束なんです。ところがあるとき、一本刀土俵入りっていう芝居で、女の子の役をさせられましたら、長谷川伸先生が「いま出ている子役は、なかなかうまいじゃないか」っておっしゃったんだそうです。父が、「うちの息子です」っていいましたら、「ずうっと見てたけど、最後まで女の子だと思ってたよ、うまいじゃないか」とほめてくださったんです。

井深 一本刀に女の子が出てきますか。

津川 出てきます。おつたという女の、前の男との間にできた子なんです。

井深 相撲取りの出てくる前ですね。

津川 ええ。そしてその父親が帰ってきましてね。「これがチャンだよ」といわれても、子どもの方はなかなかチャンとはいわない、それ、やっと「チャン！」ってよんで、ま、涙をさそう場面なんですけどね。長谷川先生が「そういえば、あの子役はときどき前のところをさわってたな。女の子にしちゃ変だと思ったが、やっぱり男の子だったのか。こんどから気をつけなさい」って教えてくれて、とてもはずかしかったの、覚えてますけどね。

井深 ハハハハ。

津川 そういうことがあったあとで、うちへ帰ってみたら、その電気機関車があったんですよ。

井深 ほう！どうして？

津川 「あの先生はとてもえらい先生なんだ。お父さんなんかほめられたことがない長谷川先生に、お前はほめられたんだ。だからごほうびにこれをやる」って。

井深 ほう・・・さすが役者だな。

津川 ええ、おやじはうまかったと思いますよ。役者としてほめられたことの値打ちと、自分の力で、夢が実現する、という体験と、両方をいっぺんに小さな息子の私に味わせたわけですよ。

井深 お父さんもなかなかの教育者だ。

津川 ほめられ方と、与えられ方 - 最高でしたよね。親にしてみれば、息子にやらせたい職業に、

うまくはめ込んだ、その陰謀。

井深 芝居っ気。

津川 演出ですよ。

井深 いくつのときでした？

津川 数え年で7つでした。

井深 …私も思い出すことあるなあ。私は小学校のころ愛知県にいましたんでね、広告かカタログで見たんだろうな、東京に、いろんな材料を組み立ててあそぶ科学教材を売る会社がありましてね、それを次から次へと注文して買ってもらうんですけど、お金を送って、品物が着くまで、半月ぐらいはらくにかかっちゃうんですよ。だから学校から帰ってくるたびに、まだ着いてないか、まだ来てないかって、その待ち遠しいことといたら！今でも思い出しますねえ。

津川 そういう期間のすてきさというの、ありますねえ。

井深 求めるものがすぐ手にはいるのもうれしいにはちがいないけど、有難味は少ないねえ。

津川 そういえば、思いあたりますね。私たち夫婦は仕事の関係で、娘といっしょに寝てやる、ということがなかなかできないんですが、それを私、逆手にとりましてね。事ある毎に「パパはお前と寝たい、寝てくれ、寝てくれ」っていうんです。そうすると当然「いやだ」っていいます。それがいま定着して「パパとは絶対寝ない」ということになっちゃいました。彼女の方から拒否してる形です。結局、満ち足りすぎて、拒絶反応が出てきたのかなあ、という気がするんです。

井深 なるほど。

津川 ソニーの例のトーキングカード、あれをぼく、娘に与えたときにも、はじめは楽しく遊んでいたんだけど、あまり効果はないようだったんです。それで私、とり上げちゃって、ぼくがそれで遊んで、「これはパパのだ」っていっていると、それをみてこんど前より熱心にやりたくなっちゃうわけですね。「となりの芝生は青い」みたいに…。

おとなが買いにくるおもちゃ屋

井深 お宅ではお子さんは、おいくつ？

津川 7歳になりました。娘が生まれましたときにね、まず最初のおもちゃって何だろうって思いました。そうすると、おしゃぶりですよ。おしゃぶりはやっぱりプラスチックじゃなくて、木だ、と。で、探しに行ったら、ないんですよ。

井深 そりゃ、やっぱり木だなあ。衛生的にはプラスチックの方がいいかも知れないけど。

津川 やっと、高級なおもちゃといっしょに陳列ケースの中に出ていたのを、2、3個買って、与えることができましたがね。

井深 おもちゃ屋さんをやっておられるということ伺いましたけど、そんなことからですか？

津川 ええ、娘を連れて、遊園地めぐりとおもちゃ買いの旅をしようという計画を持っていて、

世界のおもちゃ屋って、どんなおもちゃがあるのかなって、情報を集めていたんです。そしたらニュールンベルクに、世界中のおもちゃが一堂に集まる見本市があるから、そこへいらしたら、みんな見られますよって教えてもらったんです。

井深 あれ、普通の人、入れてくれますか？

津川 キディランド(原宿にあるおもちゃの専門店)の一員として、いかせてくれる、ということで、連れていってもらいました。ま、それがきっかけになりましたね。

井深 あなたのおもちゃ屋さんは、どこですか？

津川 青山1丁目のツインビルの西館です。一度ぜひお寄り下さい。

井深 輸入品ばかりですか。

津川 ええ、輸入品が主ですが、日本でもいいがん具職人がいっぱいいるんですよ。皮のお人形をつくっている人とか、ミニアチュアの家具をつくる人とか、カラクリ人形を昔のままつくってる人とか。だけど色彩にしても、堅牢さにしても、素材の使い方にしても、外国の方がいいですね、やはり。

井深 子どもが買いに行くお店ではないわけですね。

津川 ええ、おとなが買いにきて、子どもに与える - そういうおもちゃ屋です。だいたい零歳から3歳ぐらいまでの、素朴なものが中心です。

井深 近ごろはかえって、外国で日本の物ばかり売っているんで、面白くなくなりましたね。

津川 ぼく、アメリカのおもちゃは、ほとんど知らないんですが、この間、メリーゴーランドの、いいのをアメリカでみつけましてね。ぼくはメリーゴーランドというのは、ただグルグルまわるだけでなく、高くなったり低くなったりしながらまわるものだ、と思っていたんですが、そういう動き方をするメリーゴーランドってないんですよ。ところがそういうのを、この間アメリカでみつけて、「わーい、これほしい！」っていいましたら、これを買うやつは間違いだって、とめられちゃいましたね。聞きましたら、こんなに小さくて40何万円なんですよ。「やめなさい、商売になるものじゃありませんよ、買うのはバカですよ」っていわれたら、腹が立ってね、「じゃ買っていこう」って(笑い)、3台ばかり買って(笑い) 適当に値段をつけておいたら、2台は売れちゃいましたよ。買う人がいるんです、やっぱり。

井深 ははーん！いやこれは。

津川 高いといえば、日本で馬鹿にしてるブリキのおもちゃね、日本製のああいうのが結構輸出されてまして、一時期相当出回ったんです。あれは大量生産ができないんで、工程がふえて、コストは意外に高くつくんです。

井深 なかなかくわしいわい(笑い)。私も実はおもちゃが好きでしてね、この間カンサスシティへ行きましたとき、世界でも有名なグリーティング・カードをつくる会社なんですけど、こっとう的なすばらしい値打ちのおもちゃのコレクションを、私が好きと知って、わざわざ並べておいてくれたんですよ。感激しました。津川さんもたしか、立派なコレクションをお持ちですね？ベルサイユ宮殿のミニアチュアなんか、たしか、拝見したことがあります

よ。

津川 ところで、黒柳さんのトットちゃんの本が400万部売れたとか、いま、子どもの教育については、みんな関心を持っていますねえ。ぼくが木製のおしゃぶりの話をちょっとテレビでしたら、木のおしゃぶりの売上げが倍増したそうですしね（笑い）。あともう少ししたら、世の中、とても良くなるんじゃないでしょうか。

おわり